

多義語を構成する意味の使用傾向—品詞と活用形による違い—

山崎 誠

yamazaki@ninja1.ac.jp

国立国語研究所

1. はじめに

本研究は多義語の使用実態のうち量的な分布を言語的な属性との関連で捉えるものである。具体的には、多義語を構成するそれぞれの意味が品詞が転成した場合にも維持されているかどうか、また、活用形などの語形により意味の現れ方が異なるかどうかについてケーススタディ的に調査したものである。

2. 多義性の研究

多義語の意味の量的な分布や、語形と意味との関連は、辞書の意味記述において(まれ)や(多くは～の形で)などの形で用法の多寡を示す情報として現れている。しかし、具体的にどれくらいの量的な分布になっているかは具体的な調査を俟たないと分からない。

形容詞に関しては、橋本・青山(1992)の用法調査を受けて、宮島(1993)、丹保(1997)が連用用法と連体用法における意味の現れ方の違いを指摘している。李ら(2007)では、動詞のル形、タ形、テイル形などに多義の使用傾向の違いが現れるかどうか分析したもので本稿のアプローチに近い。また、文章中での多義の出現傾向についてはGale et als. (1992)、山崎(2010)など結束性に基づく分析がある。

3. データと処理方法

本稿で使用したデータは『現代日本語書き言葉均衡コーパス』(以下、BCCWJと略す。)である。検索はWeb版アプリケーション「中納言」を利用した。収録データ及び語数は以下のとおりである¹。

データ	語数
書籍 (生産)	2415 万語
書籍 (流通)	2908 万語
雑誌	207 万語
新聞	76 万語
白書	489 万語

¹ 語数は短単位で数えたもの。空白・記号・補助記号は含んでいない。短単位とは、ほぼ形態素に相当するところの最小単位の1回結合までを許す言語単位である。詳細は小椋ほか(2010)を参照。

ベストセラー 368 万語

Yahoo!知恵袋 516 万語

「中納言」で検索される結果は短単位であるため、基本的に他の語と複合語を形成しない用法が抽出され、複合語のうち最小単位の1回結合に該当するのは抽出されない。ただし、複合語のうち、接辞と結び付くものや文法的複合動詞を形成するものは接辞や複合動詞後項が切り出されるため、前項要素として抽出される。今回の分析はそのような条件のもとで行ったものである。

また、本稿では全体的な使用傾向を探るため、検索結果が200例を超える場合は、ランダムに選んだ200例を分析の対象とした。なお、意味分類の際、誤解析や分類不能の例は対象から外し、正味200例を抽出している。

4. 品詞の転成

ここでは和語の動詞とその連用形転成名詞との関係について扱う。一般に、和語の動詞が多義語である場合、その転成名詞よりも多義語を構成する意味の数が多。例えば、『明鏡国語辞典』第2版(以下、『明鏡』と略す。)で見ると、「当たる」には自動詞として17個、他動詞として2個の意味があるが、その名詞形である「当たり」の意味は9個(他に造語成分として2個)である。このことを踏まえ、本稿では動詞と名詞の意味の出現状況の把握がしやすいよう、それぞれの多義を構成する意味が並行的であるペアを選び考察することにした。

4.1. 「戦う」と「戦い」

「戦う」「戦い」は、『明鏡』では動詞の③④の意味が名詞③に合併した形で対応しているため、名詞に合わせて、動詞③④を1つの意味として扱った。動詞「戦う」²

- ①武力を用いて争う。戦争する。交戦する。
- ②競技・選挙などで優劣を競う。勝負を争う。競争する。

² 以下、語釈は『明鏡』からの引用である。意味の理解に必要な場合は例文も挙げた。

- ③自分の利益や権利などを守ったり獲得したりするために争う。闘争する。
- ④身に降りかかる困難な誘惑などを乗り越えようとする。闘争する。

名詞「戦い」

- ①たたかうこと。戦争。戦闘。
- ②競争。競技。試合。
- ③抗争。闘争。「貧苦との—」「労使の—」

表1 「戦う」「戦い」の意味の分布

意味	動詞	(%)	名詞	(%)
(1)戦争	146	(73.0)	145	(72.5)
(2)競争	19	(9.5)	28	(14.0)
(3)闘争	35	(17.5)	27	(13.5)
合計	200	(100.0)	200	(100.0)

表1からは、動詞、名詞とも意味の分布には差がないことが確認される。同様に表2からもデータごとの出現状況は動詞と名詞とでほとんど同じであることが見て取れる。

表2 「戦う」「戦い」の意味の分布（データ別）

データ	動詞			名詞		
	(1)戦争	(2)競争	(3)闘争	(1)戦争	(2)競争	(3)闘争
書籍	137	15	33	135	25	25
雑誌	1	3	0	4	1	0
新聞	0	1	0	1	1	2
白書	0	0	0	1	0	0
Yahoo!知恵袋	8	0	2	4	1	0
合計	146	19	35	145	28	27

4.2. 「潤う」と「潤い」

動詞「潤う」とその名詞形「潤い」には全く平行する以下の3つの意味が認められる。

動詞「潤う」

- ①ほどよく水けを帯び（て生き生きす）る。適度に湿（しめ）る。
- ②恵みを受けて、経済的なゆとりができる。金銭的に豊かになる。
- ③心にうるおいが与えられる。

名詞「潤い」

- ①湿りけ。水け。
- ②経済的なゆとり。
- ③しっとりとした情趣や精神的な豊かさ。

BCCWJにおける意味の分布は表3のようになっている。

表3 「潤う」「潤い」の意味の分布

意味	動詞	(%)	名詞	(%)
(1)物理的	61	(45.2)	84	(42.0)
(2)経済的	59	(43.7)	5	(2.5)
(3)精神的	15	(11.1)	111	(55.5)
合計	135	(100.0)	200	(100.0)

表3からは、動詞では「(3)精神的に潤う」意味が少なく、名詞の場合は「(2)経済的な潤い」の意味が少ないことが分かる。意味の分布では動詞と名詞には並行的でない関係が見いだされる。名詞の「(3)精神的」の用例を見ると、「潤いある」「潤いのある」が54例を占めている。これらの形は抽出した中では1例を除き「(3)精神的」の意味で使われていた。

表4はデータ別に分布を見たものである³。ここでは各データの違いが見て取れる。雑誌では、動詞でも名詞でもほとんどが「(1)物理的」の意味であること、白書は、動詞でも名詞でも「(3)精神的」の意味がほとんどであることが分かる。

表4 「潤う」「潤い」の意味の分布（データ別）

データ	動詞			名詞		
	(1)物理的	(2)経済的	(3)精神的	(1)物理的	(2)経済的	(3)精神的
書籍	31	50	10	32	5	41
雑誌	23	2	2	50	0	1
新聞	0	0	0	0	0	0
白書	0	0	3	1	0	68
Yahoo!知恵袋	7	7	0	1	0	1
合計	61	59	15	84	5	111

4.3. 「扱う」と「扱い」

「扱う」「扱い」もほぼ平行した形で意味が対応している。

動詞「扱う」

- ①物などを手で動かしたり、有効に使ったりする。また、道具・機械などを操作する。取り扱う。
- ②ある一定のしかたで他の人を遇する。
- ③あるものを（仕事として）取り上げてそれを処理する。また、ある問題やテーマとして取り上げる。
- ④《「～として—」などの形で》それに相応するものをみなして、物事などを処理する。

名詞「扱い」

- ①物や道具・機械などを扱うこと。扱い方。取り扱い。
- ②人を遇すること。もてなし。あしらい。待遇。対応。応対。
- ③物事を処理すること。処理法。
- ④それに相応するものとして、～として扱うこと。

表5によると、動詞では「(3)処理」の意味が半数近くを占めるのに対して、名詞では「(4)相応」の意味がほぼ半数を占める。これは、名詞のほうに「子供扱い」「特別扱い」などの例が多かったためである。

³ 書籍（生産）・書籍（流通）・ベストセラーをまとめて「書籍」としている。以下の表も同じ。

名詞の「(2)待遇」の意味では、57例中27例が「扱いを」という連続として現れていることが特徴的である⁴。

表5 「扱う」「扱い」の意味の分布

意味	動詞	(%)	名詞	(%)
(1)操作	54	(27.0)	19	(9.5)
(2)待遇	31	(15.5)	57	(28.5)
(3)処理	95	(47.5)	27	(13.5)
(4)相応	20	(10.0)	97	(48.5)
合計	200	(100.0)	200	(100.0)

表6 「扱う」「扱い」の意味の分布(データ別)

データ	動詞				名詞			
	(1)操作	(2)待遇	(3)処理	(4)相応	(1)操作	(2)待遇	(3)処理	(4)相応
書籍	44	27	81	19	16	51	24	72
雑誌	2	1	4	0	1	2	0	4
新聞	0	0	0	1	1	1	0	1
白書	0	0	4	0	0	0	2	1
Yahoo!知恵袋	8	3	6	0	1	3	1	19
合計	54	31	95	20	19	57	27	97

表6から、データごとの出現状況では、「扱う」「扱い」ともに、書籍が圧倒的で、そのほかのデータにはあまり出現していないことが分かる。

5. 活用形による違い

小林(2008)では、白書に現れた形容詞について活用形ごとの頻度及び肯定・否定、過去・非過去の頻度を挙げ、日本語教育の立場からシラバスに対する提言を行っている。本稿では、活用形ないしは語形と意味とが頻度の上でどのような対応を示すのか観察する。

5.1 「甘い」

形容詞の活用形が

「甘い」は、『明鏡』の①～③(味・香り)、④(甘美)、⑤～⑪(厳しくない)の3つに分類した⁵。表7は活用形ごとの意味の分布である。

表7 「甘い」の活用形ごとの分布

	全体	語幹	終止形	連体形	連用形	連用形-促音便
(1)味・香り	89	17	10	46	14	2
(2)甘美	39	3	1	25	10	0
(3)厳しくない	72	17	7	23	20	5
合計	200	37	18	94	44	7

「甘い」については、『明鏡』の注記に、以下のような記述がある。

「④[多く連体形で]心がとろけるように快い。また、愛情こまやかにうちとけている。甘美だ。」この④は上記の表7の(2)に対応する。そこで、(2)

⁴ このうち21例は「扱いを受ける」の形である。

⁵ 具体的な語釈は字数の関係で省略する。

の意味の出現状況を見てみると、39例のうち、約2/3が連体形で現れていることが分かる。上の指摘は大體適正と言えよう。

ここで注目したいのは連用形促音便の形である。連用形促音便は検索結果ではすべて「甘かった」という語形として実現している。検索結果全体では「甘かった」が111例出現しているが、これらの意味分布を見てみると表8のようになる。表8からは「甘かった」は80%の割合で「(3)厳しくない」という意味に偏っていることが分かる。

表8 「甘かった」の意味の分布

	用例数	(%)
(1)味・香り	20	(18.0)
(2)甘美	2	(1.8)
(3)厳しくない	89	(80.2)
合計	111	(100.0)

また、連用形の「甘く」は、「(3)厳しくない」の意味の約半数が「甘く見る」という慣用表現であること、「(2)甘美」の例は10例中8例が書籍(生産)の成人向け描写に使われているという偏りが見られた(残2例は書籍(流通)とベスセラーが1例ずつ)。書籍(生産)は、出版リストに基づき選定されたサンプルであるため、このような成人向け書籍も含まれている。この点については、サブコーパスの違いが用法の差として現れる例として注意したい。

○「甘すぎる」

「甘い」の派生語「甘すぎる」は形と意味の対応がきれいに分かれていることが特徴的である。表9は検索結果に出現したすべての「甘すぎる」69例のうち、分布に偏りのありそうな例59例を抜き出して調べたものである。

表9 「甘すぎる」の語形と意味の分布⁶

	甘すぎず	甘すぎる	甘すぎた	甘すぎて	甘すぎない
(1)味・香り	9	0	0	6	5
(2)甘美	0	0	0	1	3
(3)厳しくない	0	22	8	3	2
合計	9	22	8	10	10

表9からは、「甘すぎず」が「(1)味・香り」の意味だけに偏り、「甘すぎた」「甘すぎる」が「(3)厳しくない」の意味だけに偏ることが分かる。

○「甘め」

「甘い」に程度を表す接辞「め」が付いた形、「甘

⁶ 「甘すぎない」には、「甘すぎなくて」「甘すぎません」を含む。

め」は、表10にあるように「(1)味・香り」の意味が多い。甘い程度を表すのであるから、全体の傾向に一致することが期待されるが圧倒的に「(1)味・香り」の意味になっている。

表10 「甘め」の意味の分布

	甘め
(1)味・香り	27
(2)甘美	3
(3)厳しくない	3
合計	33

5.2 「戦う」

4.1 で挙げた「戦う」には、同時を表す接続助詞に続く「戦いながら」の形に意味の偏りが見られた。「戦う」は全体では7割が「(1)戦争」の意味なのに対して、「戦いながら」の形は約7割が「(3)闘争」「病魔と闘いながら」などの意味であった。

表11 「闘いながら」の意味の分布

意味	戦いながら	(%)	「戦う」全体での%
(1)戦争	14	(23.0)	73.0
(2)競争	3	(4.9)	9.5
(3)闘争	44	(72.1)	17.5
合計	61	(100.0)	100.0

5.3 「叫ぶ」

動詞「叫ぶ」には、『明鏡』では次の2つの意味が挙げられている。

- ①大声を出して言う。大声を発する。
- ②強く主張する。声高に訴える。

BCCWJで200例を抽出して観察したところ、「(2)主張」意味は約10%ほどであった。しかし、未然形「叫ば」に接続する形「叫ばず」「叫ばない」「叫ばれる」については、「(2)主張」がほとんどを占めることが分かった。

表12 「叫ぶ」の未然形の意味の分布⁷

意味	叫ばず	叫ばない	叫ばれる
(1)大声	11	13	12
(2)主張	1	0	143
合計	12	13	155

6. おわりに

多義性のある和語の動詞とその名詞形とでは意味に平行性が認められてもそれらの出現頻度の傾向は異なるものがあることが分かった。

⁷ 「叫ばない」には、「叫ばなかった」「叫ばなく(ても、とも、等)」「叫ばなければ」を含む

また、「甘い」の例のように活用形と意味との対応関係についても偏りが認められる場合があった。

さらに、「甘すぎる」「甘め」「闘いながら」「叫ばれる」のように特定の語形が一つの意味に集中しやすい例があることも分かった。

このような現象は、データにおける素材や場面の多寡に依存しているのだろうか。そうであれば、内容や話題が異なるデータで観察すると本稿の結果とは異なる傾向が確認されるだろう。あるいは、意味的な属性と関連する特徴として捉えられるものなのか、今後類似の例などを対象にしてさらに考察を進めたい。

[謝辞] 本研究は、文部科学省科学研究費補助金特定領域研究「代表性を有する大規模日本語書き言葉コーパスの構築:21世紀の日本語研究の基盤整備」(平成18~22年度、領域代表者:前川喜久雄)による補助を得た。また、本研究は、国立国語研究所の共同研究プロジェクトテキストにおける語彙の分布と文章構造による研究成果の一部である。

[参考文献]

- 小椋秀樹・小磯花絵・富士池優美・宮内佐夜香・原裕(2010),『『現代日本語書き言葉均衡コーパス』形態論規程集第3版』(LR-CCG-09-12), 国立国語研究所
 小林ミナ(2008),『『白書』にあらわれたイ形容詞』、『代表性を有する書き言葉コーパスを活用した日本語教育研究』平成19年度研究成果報告書, pp.19-28.
 丹保健一(1997),「形容詞の連体,連用,終止用法の出現頻度と意味との関連性をめぐって:「高い」「広い」「寂しい」を例として」,「三重大学教育学部研究紀要 人文・社会科学」48, pp.9-18.
 橋本三奈子・青山文啓(1992)「形容詞の三つの用法:終止,連体,連用」,「計量国語学」18-5, pp.201-214.
 宮島達夫(1993),「形容詞の語形と用法」,「計量国語学」19-2, pp.94-104.
 山崎誠(2010), テキストにおける多義語の意味実現の傾向, 計量国語学会第54回大会, 予稿集 pp.25-30.
 李在鎬・鈴木幸平・永田由香・黒田航・井佐原均(2007)「動詞「流れる」の語形と意味の問題をめぐって」,「計量国語学」26-2, p.64-74.
 William A. Gale, Kenneth W. Church, and David Yarowsky(1992). One sense per discourse. In Proceedings of the workshop on Speech and Natural Language, pp.233-237, Harriman, NY.